

# アイヌの御目見(ウイマム)儀礼

小玉貞良『松前屏風』を導入として

Ainu Courtesy Omemie (Uimamu):  
Introduction to "Matsumae-byobu" by Teiryō Kodama

菊池勇夫

KIKUCHI Isao

はじめに

①『松前屏風』に描かれたアイヌ

②文献史料にみる丸小屋逗留と御目見

③『蝦夷国風図絵』にみるアイヌの藩主謁見

おわりに

## 【論文要旨】

『松前屏風』は、地元の絵師小玉貞良が蝦夷地の場所を請け負う商人の依頼によって、18世紀半ば頃の松前藩の城下町（福山）の景観を描いたものである。この屏風の読解の1つの試みとして、唯一アイヌの人々が描き込まれている松前来訪の部分に焦点をあててみた。

彼等は毎年5月前後に襲装した船で蝦夷地各場所から貢物を持ってきて、沖の口番所近くの浜辺に、円錐状の丸小屋と呼ばれる持ち運び可能な仮設の住まいを作り、そこに滞在した。屏風にはアイヌの乙名（オトナ、村の長）らが松前藩主に謁見するために、藩士（通詞）に案内されて丸小屋から松前城に向かうところが描かれている。

近世初期、松前城下はアイヌの人々が蝦夷地から盛んにやってきて交易（＝ウイマム）する場であった。1640年代頃より商場知行制が展開してくると、松前の船が蝦夷地に派遣されるようになり、アイヌの城下交易は衰退を余儀なくされた。1669年のシャクシャインの戦い以後、このウイマム交易は松前藩によって御目見儀礼に変質させられ、松前藩の政治的支配の浸透として理解されている。しかし、見方を変えてアイヌ側からこの18世紀の御目見儀礼を捉えるならば、アイヌ側の主体的な意思もまた汲み取ることができるのではないか、というのが本稿の主眼である。

18世紀末になると、松前城下からアイヌの丸小屋の風景が消えていく。それはどのように評価すべきことなのか。おそらくはシャクシャインの戦い以後の近世中期的な松前藩とアイヌの関係の終焉を意味していたに違いない。

## はじめに

国立歴史民俗博物館の近世展示のリニューアルにあたって、「東アジアのなかの近世日本」という大テーマが掲げられた。列島北部のアイヌの人々の歴史・文化もまたそのなかに構成主体として位置づけようとのねらいが含まれていた。もとよりアイヌ史は日本史の文脈のみによって語られるべきでなく、そのための展示の工夫に検討が重ねられた。ただ、近世日本の対外関係の一環としてアイヌ社会との関わりを示そうというとき、アイヌ社会への窓口となった松前藩の存在や役割にも触れないわけにはいかなかった。対アイヌ関係をビジュアルに表現する松前藩の適当な資料が乏しく思われたが、18世紀半ば、小玉貞良という松前在住の絵師によって描かれた『松前屏風』が浮かび、それを取り上げることになった。本稿はその展示解説の必要から生まれた1つの考察である。

『松前屏風』は松前城下の景観を描いた都市図屏風で、後述のように、松前と江差がセットになっていくつか制作された。展示に使用した松前町郷土資料館所蔵本(図1)には、中央に配された最北の近世大名松前氏の居館(福山館)をはじめとして、その背後に並ぶ寺院群、段丘上の立派な武家屋敷、海浜および川の沢筋に展開した町人町、暖簾を掲げる商人店や白壁の土蔵、入港する弁財船や庭帆の地元船、船・荷・人を改める沖の口番所(役所)、地方支配機構の要である町役所、2ヶ所の高札場(浦高札・松前氏宛朱印状)、道を行き来するさまざまな人々、馬士に牽かれた荷を運ぶ馬、戯れる犬、そして冠雪の千軒岳など、繁栄する松前城下の様相が岩木山のある本州側から鳥瞰的に描かれている。その一つひとつを文献史料などと付き合わせながら丁寧に批判・考証していくことによって、最北大名の城下町の確かな像に迫っていくことが可能となろう。

この屏風のなかに、アイヌの人々が描かれた場面が1ヶ所だけ存在する。松前藩主に謁見するために松前城下に来訪してきた蝦夷地のアイヌの人々である。もしそれがなかったら、『松前屏風』の画面から松前藩の対アイヌ関係を視覚的に感じ取るのは困難であり、上記の目的に適わなかったに違いない。松前藩ではその藩主謁見を「御目見」と呼び、アイヌ社会ではウイマム(ウイマム)

図1 『松前屏風』(全体図)。松前町郷土資料館所蔵。国立歴史民俗博物館展示用撮影画像による。

と称した。両者間の政治的儀礼行為であるが、ウイマムは本来交易、あるいは交易するという意味であったから、主従関係の確認を含意する日本社会の「御目見」とアイヌ社会のウイマムとの間には受け止めかたの差が当然ながら存在していよう。そのことにも留意しながら、本稿では『松前屏風』のその部分の読解を導入にして、北方域におけるロシア登場以前の、松前藩とアイヌとが取り結んでいる「御目見」儀礼の内実についてささやかながら検討を加えてみよう。

## ①……………『松前屏風』に描かれたアイヌ

小玉貞良筆『松前屏風』は現在、『松前屏風（6曲1隻）』（岡田家旧蔵、現松前町郷土資料館所蔵、以下A本）と『松前江差屏風（6曲1双）』（大阪・田付家所蔵、以下B本）、の2作品がよく知られている。その発見の経緯や絵師の作品などについては先行研究<sup>(2)</sup>によるとして、ここでは簡単に触れるにとどめたい。A本は本来、江差の屏風とセットであったと考えられるが、発見時にはすでに『松前屏風』だけになっており、その後も江差側の屏風の行方は分かっていない。A本は岡田家（岡田弥三右衛門、〃・いちぜんばし印、恵比須屋、近江国蒲生郡加茂村、西蝦夷地フルヒラ・オタルナイ場所など請負）、B本は田付家（田付新助、予・いっちょう印、福島屋、近江国愛知郡柳川村、西蝦夷地フルウ場所請負）の当主がそれぞれ制作依頼者となって、松前・江差の繁栄ぶりを小玉貞良に描かせ、それを郷里の本店にもたらし<sup>(3)</sup>たものと推測されている。このA・B本の他に、もう一つの松前・江差の屏風のセットC本がありそうだが、それは『江差屏風』（函館市個人蔵）しか見つ<sup>(4)</sup>かっていない。

絵師貞良の経歴もほとんど分かっていない。B本の屏風に「龍圓齋行年七十才筆」と落款があり、晩年の作品であった。他の作品に松前産、松前生と自記していることから、松前に住み続けた地元の絵師で、玉圓齋とも称していた。年号がはっきりしているのでは、戦災で焼失してしまったが、青森の広田神社に宝暦9年（1759）閏7月20日、越前屋五郎右衛門が奉納した貞良筆の絵馬『熊狩之図（アイヌ熊射殺之図）』があり、宝暦頃に存世していたのは間違いない。

A・B本の制作時期について、画法などからA本がB本よりさきに描かれ、A本が宝暦年間とすれば、B本はそれより若干年代が下ると考えられてきた<sup>(5)</sup>。舟山直治氏は通説に再検討を加え、描かれたものの有無を手掛かりに、B本にあってA本にない、七面山（寛延元年・1748に七面社を山に移転）、立石野の石碑・堂宇（寛保元・1741年7月19日大島噴火、同年8月18日津波犠牲者の供養・卒塔婆、寛保2年または延享3・1746年無縁堂建立）から、A本は1741年の噴火・津波以前、B本は1748年以後の制作であることを明らかにした<sup>(6)</sup>。本稿もその考証にしたがいたい。

付け加えておけば、画面中央の福山館（松前城）であるが、A・B本とも櫓1ヶ所（南東角）、物見2ヶ所（西の方、北西の角）が描かれている。このうち、南東角の櫓（二之丸東南遠見矢倉、角櫓）は宝暦4年（1754）8月28日に「焼込」「焼失」し、明和2年（1765）に再建（建築費861両余）<sup>(7)</sup>されており、それがあ<sup>(8)</sup>るのは、A本より後のB本は宝暦4年以前、あるいは明和2年以後の作品であることを示すのかもしれない。ただ、当時の福山館は描かれるような石垣・白壁の塀ではなく、実際は木柵・板塀であったから（『松前蝦夷記』、享保2・1717年）、城郭らしく描写するために焼失しても記憶によってあったごとく描くことは十分にありうるので、B本の制作下限の決

め手にはなりにくい。無から有への津波供養碑、七面山の例とは同列には扱えない。

さて、A・B本の『松前屏風』に描かれた景観の季節であるが、邸内・境内などの樹木の紅葉や、白雪の岩木山・千軒岳（A・B本）、初雁（A本）などから、秋あるいは初冬であることを示している。一方のB本『江差屏風』には花咲く（桜・こぶしを描くか）季節の鯨の刺網漁が描かれている。春の江差に秋の松前という対比であった。なお、箱館とのセットがみられないのは、18世紀半ば頃から箱館は昆布などの集荷地として発展していくとしても、まだ江差港の春の活気には及ばないと評価であったからだろう。

『松前屏風』のなかの点景といってよいが、御目見（ウイマム）で松前城下を訪れたアイヌの人々が沖の口番所近くの浜辺に描き込まれている。その場面は、A・B本どちらの屏風にも見られ、A本よりB本のほうがやや詳しい。B本を観察した越崎宗一によれば、沖の口番所前の磯につけられた糺装したアイヌの貢舟（ウイマムチップ）、葎で仮につくった丸小屋とともに、飾剣を背に吊した酋長が妻子や、献上の熊皮・乾鮭などの土産物を背負った従僕（ウタレ）を従え、通詞に案内されて出掛けようとしている有様が描かれているという。<sup>(9)</sup>越崎は『松前屏風』のアイヌの御目見（ウイマム）にいち早く着目した人であった。

『江戸時代図誌』8にB本のその部分がやや大きめ目に掲載されているので、およそことが判別可能である（図3）。<sup>(10)</sup>越崎の観察に付け加えれば、沖の口番所の前の浜には糺装した2艘のウイマムチップが描かれ、左側の船には白い衣服を着た鬚のある人物が乗っている。アイヌの船（チップ）であれば、カンジ（車櫂）をつけるタカマジが突起状に舷の上についているはずだが、<sup>(11)</sup>確認できない。丸小屋は2つ設営され、2つとも入口部分に半円状の張出しがつけられている。アイヌの家屋（チセ）にセムという前室部分が付属するのに類似した構造である。右のほうの入口張出しには鉄鍋のようなものが置かれている。左側の丸小屋の左右に葎で包んであるのは貢物であろうか。アイヌは前述の船に乗っている人を含め、全部で8人描かれている。前述の船に乗る1人、左側の丸小屋の入口張出しの前に座っている2人、同じ丸小屋の左後ろでなにやら長い物を肩に担いでいる1人、そして紺色の衣服（ジットク、蝦夷錦）を着た人物と、それに続く黄色の衣服（アツシ、アットウシ）を着た3人（その一番後方の物が背に荷を負う、従者、ウタレ）である。城のほうを指差す紺色の人物（集団の酋長）以下の4人は、刀を指した麻上下を着た人物（通詞・通辞か）に案内されるように、城に向おうとしているところなのであろう。この絵自体から、越崎が述べるような飾剣、妻子、献上の熊皮・乾鮭などを識別できるわけではない。後で取り上げる『ウイマムの図』や『蝦夷国風図絵』

図3 『松前江差屏風』（部分、丸小屋）。  
森谷勉久編『江戸時代図誌』8（筑摩書房、1977年）より転載。

からの知見が入り込んだ説明となっている。

A本にも同様にアイヌの人々が描かれる(図2)。ただし、ウイマムチプらしい船は浜には描かれていない。また、2つある丸小屋は並んでおらず、入口の張出しもなく、周囲の蓮の巻きかたなどもB本よりは簡略である。アイヌは、刀をさした麻上下の通詞に案内され、城に出掛けようとしている5人である。城のほうを指差す青っぽい色の衣服(ジットク、蝦夷錦)が長で、それと手をつないで歩いている黄色の衣服の女性らしいのが妻のようである。その後ろに黄色の衣服と白色の衣服の男(ウタレ)が続き、1番後ろには黄色の衣服を着て頭髮も一部を残し剃っている子供がいる。盛装していれば太刀を背負っているはずであるが、それなども描かれていない。したがって、かなり省略されているが、首長の妻子、従者であることがB本よりは明確に意識されている。

越崎は『福山秘府』『延宝中より和田氏代々日記合書』といった文献史料から御目見(ウイマム)の記事を抄出し、アイヌの人々が松前城下にやってくるのは2月から7月の間、とくに5月に集中していることを明らかにしている。したがって、秋・初冬の季節を描く『松前屏風』にアイヌの来訪が登場するのは不自然であり、絵師がそのことを承知のうえで描き込んだ点景だったのではあるまいか。松前藩の成り立ちが他の大名とは違うところは、交易を中心とする対アイヌ関係を柱としていたことだった。そのことを明示的にシンボリックに表現するものとしてアイヌの御目見(ウイマム)が選び出されたのだといえよう。

『松前屏風』A・B本のアイヌの松前(福山)来訪の場面は細部を比較すれば違っているものの、モチーフは共通しており、バリエーションの範囲内の描き方である。オリジナルな図案ではなく、何か元になる絵があり、それを利用しての描き込みだったに違いない。『松前屏風』A・B本との制作年代の前後関係は不詳であるが、同様の場面を描いた、同じく小玉貞良筆とされる『ウイマムの図』(双幅、無落款、制作年代不詳)がある。現在、この絵は『蝦夷古代風俗之図』のタイトルで右図のみが北海道大学附属図書館北方資料室の所蔵であるが、左図が所在不明となっている。ただ、高倉新一郎『アイヌ政策史』、同新版に「ウキマムの図」として左右の白黒写真が掲載されているので(図4)、全体がどのような作品であったかはわかる。<sup>(12)</sup>高倉の説明によれば、その場面は丸小屋から盛装して「目見えに赴く所」であり、前の二人が「酋長」、そ

図2 『松前屏風』(部分, 丸小屋)。所蔵等は図1に同じ。

れに並んだのが「妻子」、後の二人は献上の熊皮・干鮭・串貝等を背負った従者（ウタレ）で、背景には堀と石垣、小屋の前には艤装された「ウキマムチツフ」が描かれている。

『ウイマムの図』が描く事物に少し補足しておけば、丸小屋には入口部分に三角状の張出しがつき、その前に弦のついた鉄鍋が二つおかれ、中には筵に座る女性が紋のついた漆器とともに描かれている。丸小屋の天辺には雨除けの覆いがしてある。艤装したウイマムチプは縄の綴じ目がみえるので縫合船（板綴船・イタオマチブ）であるが、車櫂をさしこむ舷の上部に設けられた突起（タカマジ）は省かれている。船首（舳）の飾りや、船尾のイナウなども描かれ、艤装船のすがたを比較的好く伝えているといえようか。首長らしき2人の男は刀を背に負い、そのどちらかの妻らしい女性は首から下げたシトキのようなものが胸元にみえる。女性が手を引く子供の衣服はアツシ（アットウシ）で、後ろの従者2人もアツシを着て、献上物を前頭部（額）で支えて背負っている。前頭部支持運搬はアイヌの人々の荷の負い方であった<sup>(13)</sup>。

『松前屏風』A・B本は、仮に『ウイマムの図』が先行する作品であったとして、それを忠実に写したものでないことは明らかであり、図柄の崩れが目につく。それでもA本における首長と妻子の一行、あるいはB本における丸小屋や艤装船の形状は『ウイマムの図』と似通っている。直接に『ウイマムの図』ではなく、それに類した別な絵でもかまわないが、絵師貞良にはこの場面の構図がすでにできあがっており、それを適当にアレンジして屏風に描き込んだと捉えてよさそうである。な

図4 『ウイマムの図』（『古代蝦夷風俗之図』）。  
高倉新一郎『新版アイヌ政策史』（三一書房、1972年）より転載。

お、B本のウイマムチブの船尾に棒を2本立て、それに横木を渡しているのが描かれているが、それは『ウイマムの図』からイナウをつけるためのものであることが知られる。

シーボルトの『日本』に掲載された、松前城下の浜辺に丸小屋を設営し滞留するアイヌの人々を描く絵(Ⅶ第18図)がある(図5)。筆頭通詞タミハチロー(馬場為八郎)を通して入手した、日本人の画家による「パノラマ」(絵巻)の「原画」からの「写生図」であるという<sup>(14)</sup>。図の説明によると、海岸に円錐状およびその前方についた屋根形天幕が設営され、天幕の後ろにある小舟から熊皮やその他の動物の皮、米俵、魚の干物を担ぎ出しているところである。また、屋根形天幕の中には台所道具を手にした婦女と、酒樽の側に座る子供が描かれる。浜辺の丸小屋はウイマムに訪れたアイヌの滞在中の生活の場となったが、その生活の雰囲気だけはよく伝わってくる。しかし、円錐状・屋根形天幕が2色(緑色、薄い黄色)の蔭で葺き分けられ、右から2人目の男性のアツシ仕立風の衣服が青色であるなど、不自然さも窺われる。この「写生画」がどこまで忠実に「原画」を写しているのか、またその「原画」も小玉貞良の『ウイマムの図』などの先行作品に依拠している可能性があるから、これを実在したものとして鵜呑みにはできない。

屏風絵ではないが、松前城下の全体の景観を描いたものとして1枚物の絵図類が少なからず残されている。「蝦夷図」(北海道図)への関心と比べたとき、松前絵図の悉皆的な所在調査や比較検討はほとんど手付かずの状態である。『松前屏風』の読解に役立てようと、『松前町史』に紹介されているもののほか、東北大学附属図書館・北海道大学附属図書館所蔵の松前絵図類を十数点閲覧してみたが、それらのなかで丸小屋を絵図中に描き込んでいるのが1点あった。

東北大学附属図書館狩野文庫所蔵の『松前絵図』がそれで、小松前の「沖ノ口」前の海岸に1棟、枝ヶ崎の海岸に2棟、丸小屋が描かれている(図6)。松前の漁民たちも丸小屋を建てるので速断すべきではないが、とくに沖ノ口の前の浜のものは『松前屏風』と同じ場所であることから、松前來訪のアイヌの人々の丸小屋とみてよいだろうか。手前の浜に引きあげられた数艘の船も、アイヌ

図5 シーボルト『日本』所収の丸小屋の図。  
『シーボルト『日本』図録第3巻(雄松堂, 1979年)より転載。

図6 『松前絵図』(部分, 丸小屋)。東北大学附属図書館所蔵(狩野文庫)。

のウイマムチプの可能性はあるが、描写が曖昧で、そのように判断できる要素は窺われない。この『松前絵図』の作成年代は七面社や館石野(立石野)の石碑らしきものがあるので、『松前屏風』A本より時代が下るが、丸小屋の消滅(後述)する時期を考慮すると天明期頃までには作成されたのであろう。

## ②……………文献史料にみる丸小屋逗留と御目見

『松前屏風』などに描き込まれた、松前城下を訪れたアイヌの人々の丸小屋での逗留、藩主への御目見を文献史料で確認してみよう。丸小屋を記述した文献は『松前屏風』の制作時期に近い18世紀のものにいくつか見出すことができる。

まず、享保2年(1717)の幕府巡見使の手になる『松前蝦夷記』がある。その一項に「年々夷仁松前志摩守<sup>(ママ)</sup> 仕出来候事」とあって、「五月末より六月にかけ段々罷越候、其節夷仁差置申候ところ浜辺に小屋懸いたし差置候由、尤其所々乙名と申頭たる者斗、大方夫婦連ニ而罷越候よし、船ニ而喰物等茂持参右仮立小屋ニ而手煮仕給申候よし」と記されている。<sup>(16)</sup> 短い記述であるが、要点がよくまとめられている。①毎年5月末から6月にかけてやってくるとあり、慣例化していたこと、②浜辺に小屋掛けし、船で持参してきた食料をその「仮立小屋」で自炊し食べていたこと、③来訪するのは所々の「乙名」と称されている首長層で夫婦連れだったことが述べられている。

元文4年(1739)の坂倉源次郎『北海随筆』は前述高倉新一郎の「ウキマムの図」解説文にも紹介されており、『松前屏風』A本の制作時期に最も近い文献となろうか。その内容を整理してみると、①「蝦夷村の酋長」である「ヲトナ」は春ごとに産物を船にのせて松前に来て「領主」(松前藩主)



に対し「礼」をつとめる、②松前に着船したならば、「木屋（小屋）」へあがり「休息」するが、「目見」が済まないうちは外へ出ず、酒盛りをせず、商いなどもしないで「穩便」に過ごしている。③「目見」の時はアツシ、鹿皮などは着ずに、「本邦」の「女衣裳」の古着を着て帯をする、あるいは「ジツトク」を着るものもある、④「目見」が済むと「領主」より酒や米をたまわる、⑤「木屋（小屋）」に帰ると、たまわった酒を中座に置いて円居し「祝儀」をする（おごそかな酒礼のあと、浄瑠璃語り・鶴の舞などあり）、⑥「目見」が済んでからは「町」に出て商いもする、⑦「遠蝦夷」は年々来るわけではなく、「近蝦夷」のみ春ごとに来る、といった点である。<sup>(17)</sup>『松前蝦夷記』に書かれていないことでは、御目見のさいのハレ着や、領主からたまわった酒による小屋での祝儀・宴会、御目見後の城下での商売、といった記述が重要な観察となっている。

少し時代が下るが、平秩東作『東遊記』（天明4年・1784初夏序）の記述も参考となろう。①「蝦夷」が「領主」へ「目見」する時には「武器」をかざって「威勢」を示す。②「蝦夷人」は手を引き合って出て、前に至れば安座し、「蝦夷の礼」を以て領主に拝する。③酒、料理をたまり、熊の皮、青玉、鷺の羽、干魚などの類を「貢献」する。④それに対する「賜物」があり、酒をたまわれば「浜」にあって、それを呑み尽してから「国」に帰る。⑤「礼服」は日本より渡った「古着縫入」のもの、あるいはカラフトより渡った「十徳」の類である。十徳とは、「錦にて製したる筒袖の物」のことである。およそそのような内容であった。<sup>(18)</sup>②の手を引き合ってというのは、御目見するアイヌの人たちが、手をつないで横向きかげんに一列になり腰をかがめ、足をひきずりながら歩く「ランカミ（ランガミ）」の礼法をさしている。<sup>(19)</sup>②に領主拝謁のことも出てくるが、それについては節を改めて述べることにしよう。

もう一つ、越崎宗一が紹介する安永6年（1777）の植田仲慶誌・同雪江亭写『蝦夷国風図絵』の「松前の城へ蝦夷人年始御礼の事」という記述がある。<sup>(20)</sup>ここでは同種の写本、函館市中央図書館所蔵『松前城へ蝦夷人年始御礼之図及蝦夷風俗』（天明三癸卯霜降月 藤芝川謹写）から引用しておこう。

毎年正月年始の御祝義に蝦夷の国乃村々乃<sup>おとな</sup>首長（割注）日本の名主也、年老の者ハ十徳を着し太刀をはきて、親子兄弟妻子孫等迄引連、進上物ハ熊の皮鹿乃皮或ハから鮭くしこ串鮑の類を下部に持せて、松前乃城へ来る也、其時ハ通詞の者麻上下にて案内押への足輕を附らるゝ也、尤御館へ上り領主へ御目見申上る、其規式甚恐れ慎しむ躰也、極月の下旬に御城下へ来り、旅宿をいたし小屋に居れとも、年始乃御礼の不相済内ハ外へ出る事なく穩便乃躰也、右のことく御目見相済て、領主より酒又米穀を給はりて後、小屋へ帰りて酒もりをいたし、各帰国いたす事也、

ここには「正月年始」の祝儀とある。確かに、最上徳内が『蝦夷国風俗人情之沙汰』（寛政2年・1790序）で紹介している、松前西方の見市村「百姓」岩之助のように年始の挨拶に来る例がないわけではなかった。<sup>(21)</sup>岩之助は「古は蝦夷にて其名イワンノシケといふて則乙名」であった。平日は日本の「野郎鬢」であるが、冬になれば月代を剃らずに「蝦夷の礼」にかえて、正月7日に領主へ出るのが「吉例」で、領主の書院の前庭に「荒菰」を敷いて座り、領主より濁酒をたまわった。「蝦夷の遺風」という。ただ、この岩之助は松前地の住民であり、右の引用にあてはめてよいかは留保が必要である。「正月年始」とあっても、内容的には蝦夷地場所から来るアイヌの御目見（ウイマム）をさしている。『松前屏風』B本の前述越崎の観察が通詞に案内されてと述べているのなどはこの記述によっていよう。

以上の記述には「小屋」、あるいは「浜」にいるとのみあって、その形状が円錐状の丸小屋であるとは想像できない。『松前屏風』あるいは『ウイマムの図』から丸小屋であると知られるのである。この浜の小屋（丸小屋）も天明期の記録を最後にして目にしなくなる。本州からの外来者が目撃したならば珍しく思い書きとめるはずであるが、そうでないのは丸小屋が浜からすがたを消したことを示していそうである。

『蝦夷国私記』という年不詳の記録がある。著者は先年、石狩山中の「天狗山」で蝦夷桧を伐り出したと記しているので飛騨屋の配下の者と思われるが、そのなかに丸小屋の消滅を窺わせる記述がある。<sup>(22)</sup>

伝御役に成時は、前方より蝦夷錦のたくひ又は唐物にても珍しきしな、志摩守殿へ献上の心かけ、夫より其村々に船を立る運上屋支配人、またハ通辞人、船頭杯へ相頼ミ、其場所のかゝり城下の船問屋を頼ミ置、親兄弟妻子迄も引連城下へ来り、船問屋江宿を取り、其宿より早速其趣を下代江届町奉行に訴出、夫より吉日を撰ミ目見を被申付、則当日献上の品を上、殿より盃を頂戴いたし、種々馳走を被申付、玄米を目録にて被下、御暇申下城いたし、帰宅後暫く休足して御暇乞に登城いたし、翌日役人被下米を持参する。夫より日和を待出帆致し、帰国して伝御役になり政事を行ふなり。

「伝御役」は松前藩の命令を地域のアイヌに伝えるという意味合いの強い表現で、「ヲトナ」（乙名）のルビが付けられている。「日本」の「在方名主」に当るとする。乙名役になるときは運上屋の支配人、通詞、船頭などに頼んで、その関係の深い城下の船問屋のところに、親兄弟妻子などを連れて泊り、町奉行を通して目見するのだという。この記録の成立時期について宝暦頃とも、天明・寛政期頃とも推定されているが、船問屋に泊るとされている点は少なくとも、『松前屏風』や、その前後する文献史料とは齟齬するように思われる。

したがって宝暦頃よりは天明・寛政期頃とみたほうがよさそうだが、寛政元年のクナシリ・メナシの戦いあたりが御目見（ウイマム）の儀礼の変化の画期であったろうか。寛政元年9月、鎮圧隊の凱旋とともに松前藩側に協力したアイヌ一行が御目見のために城下にやってきたが、このときの「旅宿小屋」はトラメキの上にある新馬場に設けた「仮小屋」で、番小屋・通詞居所も付属していた。<sup>(23)</sup>藩側が用意した小屋なので、丸小屋ではなかっただろう。ただ、これは松前藩の政治的要請に基づくものであったから異例とみるべきかもしれない。その後、寛政5年松前に渡った水戸藩の木村謙次が、中島屋莊右衛門の商家、実は松前士人厚谷新下という人の「私肆」で、厚谷の「領地シコツ」の「蝦夷」が来ていたのに出会っている（『北行日録』同年3月3日条）。<sup>(24)</sup>商場知行主あるいは場所請負人のゆかりの町人家に宿泊するかたちに変化していることを示している。丸小屋の終焉をめぐっては、さらに史料的な裏づけをして確定していかななくてはならない。

逆に丸小屋の逗留生活はどこまで遡りうるのだろうか。近世初期のイエズス会宣教師の記録が最も古い。『カルワーリュの旅行記』（1620年10月21日）のなかに、西方あるいは北東方から松前<sup>マツマイ</sup>へ交易のため妻子・家族ともども船でやってきた「蝦夷」は、「松前にいる間は、<sup>イエゾ</sup>菴と予め準備して来た木の骨組とで海浜に造った小屋に住」むと記述されている。<sup>(25)</sup>円錐状とは書かれていないが、菴と木の骨組みということから推測すれば丸小屋であったに違いない。アイヌの人たちは「礼」として「松前殿」にラッコ皮、ワシの羽根、あるいは絹布（坊主の衣・十徳用）などをもたらしてお

り、藩主とのウイマム（礼・交易）が終わると、城下での物々交換が認められ、酒造用の米と麴、あるいは酒盛のための酒を購入したとある。

丸小屋の利用はそれ以前からの古い歴史があるだろう。海辺に設営され、持ち運ばれたものだとすると、考古遺跡としては残りにくいのだと思われる。少なくとも、近世のアイヌの人々にとって持ち運び可能な丸小屋は松前来訪のときだけでなく、生業と交易のための重要な移動手段であった。18世紀末以降増加する蝦夷地・アイヌ関係の記録をみれば、丸小屋を使ったアイヌの移動が少なからず観察されている。しかも、丸小屋はアイヌのみならず、鯨漁や昆布刈りなどで出漁する松前地の和人たち、さらには蝦夷地を巡見・踏査する幕府役人などまでが宿泊の手段として利用していた。簡便な丸小屋の有用性に着目しなくてはならない。<sup>(26)</sup>

カルワーリュの記録以来、18世紀半ば近くまで、諸文献に丸小屋らしい記述がほとんどみられない。松前地の住民にとって丸小屋は珍しくもない日常の風景であったために、あえて書きとめようとの意識を生じなかったということであろう。18世紀の記述はすべて本州からの他国者の観察であることがそれを物語っている。

ところで、アイヌの御目見・ウイマムは時代とともに相当に変化を遂げている。これについては前述の越崎宗一や、稲垣令子氏らの先行研究があり、<sup>(27)</sup>『松前主水広時日記』『福山秘府』、『和田家代々日記』などに散見する記事が使われてきた。17・18世紀に限っていえば、新史料の発見は難しいので、詳しくは両論文に譲るとして、ここでは重要な論点のみを簡潔に述べるにとどめたい。

シャクシャインの戦い鎮圧後の寛文10年（1670）6月、弘前藩は松前藩に無断で「物聞」を蝦夷地に派遣し内情を探らせた。その情報によれば、余市の大将チクラケは「御訴訟のため又当御代御目見仕度存候て松前へ参候得は、御法度の所え参候とて、首を切髭を切とて、色々御せめに逢、漸々命たすかり罷帰」つてきたとのことだった。<sup>(28)</sup>「御目見」の機会を利用して不等価交換や押買など、松前藩の「仕置」の「無理悲道」を訴えようとして松前にのぼったチクラケであったが、松前へ来ること自体が御法度であるとして藩から強く叱責されたというのである。この背景には稲垣氏らが指摘するように、蝦夷地に対する商場知行制の貫徹があった。カルワーリュの記録はアイヌの城下交易の活発なすがたを伝えていたが、松前藩主・家臣の交易船がその蔵入・知行に相当する「商場」におもむき、そこで交易を実現する形態に大きく変えてしまった。それと表裏一体のこととして、蝦夷地のアイヌによる松前交易が禁じられたという関係になっていた。松前の浜辺に林立した丸小屋は商場知行がはじまる1640年代ころから急速に減っていったものだろう。その結果として丸小屋がシャクシャイン蜂起関係の記録に残されなかったといえよう。

しかし、18世紀におけるアイヌの御目見（ウイマム）の存続は、商場知行制の貫徹とともに完全にすがたを消してしまったのではなかったことを示している。確かに古川古松軒が『東遊雜記』のなかで、「松前人は蝦夷地へ行くこと自由にして、エゾ人の松前へ来ること法度にてならず」とあるように、<sup>(29)</sup>原則的には禁じられていたことではあったが、事実はずしもそうではなかった。

西蝦夷地フトロ場所の商場知行主であった和田氏の『延宝中より和田氏代々日記合書(和田家代々日記)』によれば、貞享元年（1684）～宝暦5年（1755）の間に、同場所のアイヌがほぼ2年強に1度の割合で松前城下に来ており、時期は最も早い年で2月10日、最も遅い年で7月24日、通常5月中が多く、御目見の者は乙名・脇乙名・ウタレの一行3人～6人くらい、御目見の場所は葵間

または中書院、献上物は例年干鮭10連であったようで、年によって他に鮫油、熊皮、熊胆（上品は公儀献上）があり、それに対する藩主側からの下賜品は米・麴・酒・煙草で、「御盞」を下されるのが「例之通」であった。貞享元年から記録が始まっているが、その最初年に「毎度の通干鮭拾連」とあるので、すでに慣例化していたと理解すべきである。シャクシャインの戦いを経て、先の余市アイヌの行動からも推察されるように、城下交易（ウイマム）を希望するアイヌ側の意向が反映した御目見であった。<sup>(30)</sup> 商場知行主の日記に記載されているのは知行主がアイヌ御目見の取次ぎをしていたことを示すものでもあろう。

『松前主水広時日記』は元禄5年（1692）の1年分しか見つからないが、瀬田内・相之間内（4月3日）、島子巻・尻岸内（5月1日）、すつゝ・おたすつ・石狩（同9日）、余市・しくづし・ふるう・磯谷・白老（同13日）、しこつ（同23日）、石狩・はつしやふ・ましけ・あつた・しくつし・茂入（同29日）、なこたらへ（6月2日）、しこつ（同5日）、塩泊り（同9日）、遊羅府（同20日）からのアイヌの御目見が記載されている。<sup>(31)</sup> 石狩、しこつが2度出てくるが、しこつの場合「商場」または「支配所」の知行主が異なっているので、石狩も同様の事情によるのだろう。御目見にあたっては、内容は詳しく知られないが、アイヌからの「差上物」と藩主からの「被下物」があった。これらの御目見の中には、あつたの「酋名しもたか犬」のように、「継目初て御目見」の「手印」として「小枉作り一」を差上げ、これに対し藩主側から「江茂支保一振」を下されるといった、乙名役の継目御札の事例がいくつか含まれている。各商場での有力アイヌは御目見のさいの刀の授受によって「乙名」たる地位が松前藩によって承認される、そのような機会となっていた。

この広時の日記には、アイヌの場合だけでなく、「御目見」記事が散見される。薬屋九兵衛・さし物屋勘兵衛（1月20日）、高宮屋兵助（同25日）、社人・上ノ国名主喜内（3月8日）、江差正覚院（同12日）、知り内名主・福島法界寺（同15日）、蠣崎采女倅石丸（4月10日）、関嘉左衛門（亀田御番所より罷帰り、6月3日）などといった事例で、武士、町人（含職人）、名主、寺社に及んでいた。そうした藩主を中心点として展開している「御目見」全体の中にアイヌの「御目見」も存在していることに注意を払っておく必要があろう。

右の2つの日記の御目見事例は道南、道央のアイヌで比較的慣例化していたケースであった。ただし、享保16年（1731）夏、東部エトロフ、クナシリ2島のアイヌが始めて「来辟」<sup>(32)</sup>、あるいは宝暦年中（1751～1764）に東部夷地クスリの「酋長」トヒカラインが福山に来て領主へ謁しており、<sup>(33)</sup> 稲垣氏が指摘するように「御目見」が遠場所にも拡大していった。シャクシャインの戦い以後のこれらの「御目見」儀礼をどのように評価したらよいのか、それは最後に述べることにしよう。

### ③……………『蝦夷国風図絵』にみるアイヌの藩主謁見

『松前屏風』と同じく小玉貞良の作品といわれてきた『蝦夷国風図絵』<sup>(34)</sup>（函館市中央図書館所蔵）の巻末にある「松前藩謁見の図」（図7）は挿絵として利用されることが多く、よく知られた場面である。図左の奥まった1段高いところに大紋を着た藩主が座っている。その座敷の壁面には水墨画の風景が描かれ、藩主の前の1段低い座敷には中央に儀式用の酒器などのセットが置かれ、左右に家臣が控え、すでに太刀を佩びたまま着座している乙名2人（左の人物は龍文の蝦夷錦）の前を、

家臣に手を引かれたアイヌの男2人（アツシ着用）と女1人が腰をかがめてうやうやしく縁側から座敷に入る様子が描かれている。縁側には献上品の丹頂鶴とオットセイが置かれ、縁側の手前にはよく分からないが、アザラシ皮、熊皮、串貝、干鮭とおぼしきものが描かれている。樽は魚油でも入っているものか。右側の脇座敷には鉄炮・弓・鎗の武器飾りがみられ、威圧感をかもしだしている。少なくとも、この絵によると藩主とアイヌは座敷でじかに対面し、そこで盃事が執り行われていたことになり、前節で述べた御目見の文献史料と食い違うものでもない。

この作品の成立年代がこれまで問題となってきた。<sup>(35)</sup>そのさい藩主が着る「大紋」が決め手になるかと思われた。『福山秘府年歴部』貞享3年（1686）に「松前広時日記曰、春二月三日、西部夷人来辟。于時矩広著大紋」<sup>(36)</sup>とあって、この時かと考えられたこともある。しかし、貞良の作品にある宝暦9年（1759）、あるいは行年70歳という落款を手掛かりにすると、長生きしたとしても貞享3年では若すぎ無理がある。そこで越崎は『和田本福山秘府年歴部』の延享元年（1744）に「夏四月十九日東部屈諾失里夷人来辟、于時資広著大紋」<sup>(37)</sup>の記事を見出し、このときの様子を描いたものであるとした。ただ、『福山秘府』は貞享3年の先の文の後に「自是已下、不必記夷人之来辟」と記し、アイヌの御目見は珍しくもなかったのか、必ずしも記さないとしている。藩主の大紋着用を通例のことだとみれば、延享元年に特定できるわけではない。

ところで、『蝦夷国風図絵』の各場面の図柄と共通するものが多い『風土遊覧集』（北海道大学附属図書館北方資料室所蔵）という版本があり、そのなかに「松前藩主謁見の図」（図8）も含まれている。この版本はかつて高倉新一郎によって紹介されたことがあり<sup>(38)</sup>、全5巻からなるが、うち3巻は蝦夷地と関係ない。「東之巻」序に「宝暦六歲丙子中秋 常陽学生節斎題」とあり、「北の巻」の冒頭に「東都二階堂休翁著述」と記されている。「北之巻」が享保12年（1727）に蝦夷地・女直の境を徘徊して「唐風土」を往来した時の見聞記（「東之巻」序）、「西之巻」が図集となっているが、高倉は見聞の内容も至ってつまらず、図集も松前に流布していた貞良の絵を写したにすぎないものと指摘していた。さらに高倉は著者を享保13年7月（12年とするのは休翁自身の間違い）、幕府採葉使として松前に来た二階堂慎庵、すなわち佐村八郎『増訂国書解題』によって慎叟（平湛）

---

と称した幕府評定所の儒官であるとし、『風土遊覧集』の成立事情を明らかにしていた。

この版本を再検討した五十嵐聡美氏は、その「藩主謁見の図」に藩主の大紋の家紋が消され、縁側には丹頂鶴とオットセイの他に鷺の羽が描かれていることに気づくとともに、「西之巻」の末尾に記された、予（休翁）が薬草吟味のため彼の地に久しく停留したさい、「蝦夷之人物」には詳かな「書絵」がないので、「絵工」を伴って目の当たりに観たところの人物を「正写」せしめ、梓を<sup>はんぎ</sup>鏤<sup>きざ</sup>んだ、<sup>(39)</sup>という文章に着目した。休翁が伴ったという「絵工」が小玉貞良なのではないか、とい

うのである。

その可能性はありそうに思われる。座敷でのアイヌの御目見の場面までを描けるとしたら、藩主自身の命か、幕府の威光がかかった人物の求めでもなければ想定しにくいからである。休翁は「享保十二年少々公事之筋にて彼の地ニ至り、依之城主より馳走とて珍物を見せられける」(「北之巻」)とあり、そうした饗応のうちにアイヌの御目見を見る機会が与えられ、それを描写させたとしても不思議ではない。松前に渡ったのは7月であるから、やや時期的には遅いが、7月の御目見もなかったわけではない。

二階堂休翁すなわち慎庵について、多少わかったことを記しておこう。『盛岡藩雜書』享保13年(1728)6月26日条に、公儀薬草御用として青柳慎敬老・二階堂慎庵老が下り、昨25日に花巻に到着し、その出迎えの対応についての記事がある。<sup>(40)</sup>詳しくは省略するが、青柳は「水戸様御医者之由」、二階堂は「津軽領儒者之由」、もう一人の境野専安老も「同(津軽領)家中」とその身分が記されている。また「二階堂慎庵義、去方より小禄を請居候得共、従公義御頼ニ付罷下候」ともあり、幕府儒官であったような記載ではない。『盛岡藩雜書』によるかぎりでは、江戸の弘前藩邸に仕えていたところを水戸藩の青柳とのつながりから御用を命じられたのかと推察される。実際、休翁は「二階堂先生初遊学常州水藩」(「東之巻」序)とあり、水戸藩とは深い関係があった。

盛岡藩から弘前藩に移動したので、『弘前藩庁日記(国日記)』(弘前市立図書館所蔵)にも足跡をとどめている。享保13年7月6日条に、「二階堂慎庵儀、公儀御用薬草之儀ニ付、青森より松前江致渡海候付…」という記事がある。また、同年9月7日条の「儒者二階堂慎庵申立」によれば、慎庵はすでに松前から弘前藩に戻ってきていたが、その船中で腰脚が痛み、温湯に入湯したものの痛みが止まらず、駕籠を利用したいとの願いを出していた。なお、前年の8月15日条にも、二階堂慎庵から国元の藩庁に「附子」を江戸に送ってほしいという依頼のあったことがみえる。「附子之義御典薬師衆殊之外所望」とあるので、慎庵はそのころからすでに幕府の採薬御用に関わっていたことになる。<sup>(41)</sup>

「藩主謁見の図」に描かれた藩主は誰であろうか。『寛政重修諸家譜』によれば、松前矩広(10世)は貞享元年従五位下志摩守叙任、享保5年(1720)に62歳で死去、邦弘(11世)は享保6年遺跡を継ぎ、同年従五位下志摩守叙任、寛保3年(1743)に39歳で死去、資広(12世)は元文5年(1740)従五位下若狭守(当時15歳)叙任、寛保3年遺跡を継ぎ、明和2年(1765)に40歳で死去している。<sup>(42)</sup>矩広の可能性はまずない。二階堂慎庵の採薬御用のさいに描かれたとすれば、享保13年当時の藩主は邦広である。また、『松前屏風』A本は寛保元年の噴火・津波以前の制作とするならば、そのときにはすでにアイヌ御目見の場面を描き込む前提となるような絵が存在しており、それが『蝦夷国風図絵』系統の作画であったとすれば、邦広である可能性が高いのではなかろうか。「大紋」は五位以上の武家の式服であったので、従五位下志摩守はそれにふさわしい。

## おわりに

『松前屏風』は制作依頼者の希望に応え、近江商人の経済活動に支えられた松前の繁華が主題であっただろう。『松前屏風』A本とB本を比べると、その時間差のなかでも都市の発展が窺われる

と指摘されている。<sup>(43)</sup>松前城下は拡大途上にあった。それから30年以上経た天明8年(1788)、松前に渡った古川古松軒が、「家宅の奇麗なること、都めしき所」「上々国の風俗」「江戸を出でしよりも、家居・人物・言語とも揃いてよき所は、この江指町と松前の城下に及ぶ所さらになし」などと称賛<sup>(44)</sup>していた。

このような松前の賑わいであるが、松前交易のためにたくさんのアイヌの人々がウイマム交易のためにやってきていた、近世初期のかつての盛んな有様は屏風絵から感じられない。わずかに、「御目見」のアイヌとその丸小屋が点景として描かれるだけである。松前藩とアイヌの関係がすでに述べたように商場知行制の展開やシャクシャイン戦争によって大きく変容したことが背景にあったのはいうまでもない。

しかし、シャクシャイン戦争後もアイヌの首長らによる松前来訪のウイマムが途絶えたのではなかった。18世紀のウイマムをどのように評価したらよいのだろうか。稲垣令子氏はその段階を「御目見」儀礼ウイマムととらえ、それ以前の交易ウイマム、あるいは寛政元年(1789)クナシリ・メナシの戦い以後の強制的な支配「御目見」、および蝦夷地幕領下での支配儀礼の整備の段階と区別<sup>(45)</sup>している。その段階区分は妥当と考えるが、18世紀の御目見(ウイマム)について『松前主水広時日記』などの検討から、もはやそれは交易ではなく、政治的支配被支配関係に移行したものと評価している点は、今少し再検討されなくてはならない。

松前藩が「御目見」と位置づけていたこと自体、アイヌの人々を、松前藩主を中心に形成された君臣関係あるいは主従関係のなかに取り込もうということであり、御目見の儀礼空間が政治的な「威儀」を示す場であったのは否定できない。御目見のさい有力アイヌを「乙名」役として認知し、その乙名を通じて令達し松前藩への服従をはかっていく、そのような機会であったのは確かである。

だがアイヌ側からみたらどうであったろうか。城下交易・城下立入りを禁じようとしたのがむしろ松前藩のほうであった。御目見(ウイマム)はアイヌ側が望んだ結果として存続してきたと考えれば、シャクシャインの戦いを起こしたアイヌ社会の力によるものと理解できなくもない。松前来訪の流儀は、ウイマムチブという艀装した船、ハレ着としてのジットク(蝦夷錦)の着用、浜辺での丸小屋の逗留生活、いずれもアイヌ自身のものであった。藩主と「手印」を取り交わす継目御礼もアイヌ社会の慣習に基づいている。御目見のさいの献上・下賜はもとをたどれば交易ウイマムに伴う「礼」に起源するであろうし、御目見が済んだ後には一定の城下での売買も許されていたようで、交易の意味が失われたわけではなかった。松前藩主による「乙名」役の認知は、諸刃の剣ではあるが、アイヌ社会内部における優位な地位の確保とつながっているはずである。

このように整理してみると、18世紀の御目見(ウイマム)はアイヌ側の主体的意思の側面が色濃く反映するものであった。浜の丸小屋の風景が消え、ハレ着が蝦夷錦から拝領した陣羽織に替り、御目見も場所支配人の関与によって形式化・制度化された18世紀末以降とは明らかに違っている。シャクシャインの戦い以後、クナシリ・メナシの戦いあるいは幕府による蝦夷地直轄までの、18世紀のアイヌ社会と松前藩の関係をどのように捉えるべきなのか、実態に即したより精緻な議論が必要になってきている。

『松前屏風』が制作された頃は商場知行制が商人の請負に変わっていく時代に当たっていた。大坂市場など遠隔地間流通と結びついた商人資本の活動が松前の繁華の起動力をなしていた。それがた



だちにアイヌの「疲弊」につながったものなのかどうか。場所請負によってすぐに漁場での強制的な雇労働が始まったわけではなく、しばらくはアイヌの自分稼ぎによる物々交換の交易が続いた。18世紀後・末期段階の菅江真澄などの日記・記録を読んでも、「宝」を数多く保有する豊かなアイヌの存在が珍しくなかった。『松前屏風』をながめながら、背後にある18世紀の能動的なアイヌ社会に目を向けなくてはならない。

## 註

- (1)——たとえば、田村すずこ『アイヌ語沙流方言辞典』(草風館、1996年)によれば、「uymam, ウイマム」は自動詞として「交易する、交易に行く」、また名詞として「交易」の意味で使われた。中川裕『アイヌ語千歳方言辞典』(草風館、1995年)は、語源として日本語の「初目見え(ういまみえ)」の借用説のあることを記す。最上徳内『渡島筆記』(文化5年・1808)は、「ウキマムの義きかずといへども、もし和語によりて強解せは、初見に近かるべし」としている(『日本庶民生活史料集成』第4巻525頁、三一書房、1969年)。
- (2)——五十嵐聡美「松前に生きた風俗絵師—小玉貞良について」(『紀要1990』北海道立近代美術館他3館、1990年)。永田富智「二例の松前屏風について—その作製の経過を考える—」(『新しい道史』41、北海道道史編集所、1970年)。『松前町史』通説編第1巻上(松前町、1984年)口絵に、永田氏の解説文とともにA本、B本(松前分)の全体のカラー図版が掲載されている。A本については今回展示のために撮影したデジタル画像により細部にわたって観察することができた。B本江差分の全体カラー図版は『北前船—日本海文化と江差』(『北前船』編集委員会、1986年)掲載のものが比較的大きい。
- (3)——岡田家・田付家の概要は『北海道開拓功労者関係資料集録』上巻(北海道、1971年)による。岡田家については、上村雅洋『近江商人の経営史』(清文堂出版、2000年)第2章「岡田弥三右衛門家の経営」が詳しい。
- (4)——同前五十嵐論文(モノクロ図版掲載)による。
- (5)——註(2)の永田氏の見解。
- (6)——舟山直治「絵画史料にみる近世和人地の風俗」(『北海道開拓記念館研究報告』第18号、2003年3月)。また、舟山氏からは、2005年9月18日の本研究プロジェクトの報告会(会場北海道開拓記念館)で、松前側から撮影した岩木山の写真をいただくなど、『松前屏風』に関する知見を得た。
- (7)——『旧記抄録』(『松前町史』史料編第1巻、第一印刷出版部、1974年)417頁、426頁。『御巡見使応答申合書』(『松前町史』史料編第1巻)404頁。
- (8)——『松前蝦夷記』(『松前町史』史料編第1巻)377頁。
- (9)——越崎宗一『鯨御殿』(著者兼発行人、1960年)3頁。
- (10)——『江戸時代図誌』8(奥州道二、筑摩書房、1977年)127頁。
- (11)——アイヌの「ウイマムチプ」は、村上島之允(秦徳丸)・間宮倫宗(林蔵)・村上貞助『蝦夷生計図説』(北海道出版企画センター、1990年)に図入りで詳しく説明されている。
- (12)——高倉新一郎『アイヌ政策史』(1942年、日本評論社)76頁と77頁の間。『新版アイヌ政策史』(1972年、三一書房)では口絵写真。右図のカラー図版は『蝦夷の風俗画』(北海道立旭川美術館・北海道立近代美術館、1992年)に掲載。
- (13)——拙稿「荷を負うアイヌの姿—菅江真澄の絵から—」(『年報人類文化研究のための非文字資料の体系化』1、神奈川大学21世紀COEプログラム研究推進会議、2004年)。
- (14)——『日本』Ⅶ第18図、『図録』第3巻所収(雄松堂書店、1979年)。対応する本文は『シーボルト『日本』』第6巻(雄松堂書店、1979年)76頁、85～98頁。原画となった「パノラマ」は千島(松前)春里『アイヌ風俗図巻』(オランダ・ライデン国立民族学博物館所蔵)にあたる(越崎宗一『アイヌ絵』29頁、北海道出版企画センター、1976年再版、「蝦夷風俗絵巻」。高倉新一郎「蝦夷風俗画について」『アイヌ研究』95～99頁、北海道大学生協同組合、1966年)。なお、『シーボルト父子のみた日本』(ドイツ・日本研究所、1996年)139頁によると、『日本』掲載の図版は元通りではなく、「改変」されているものがあり注意が必要との指摘がなされている。『蝦夷風俗画展』(リッカー美術館、1980年)掲載のライデン国立民族学博物館所蔵の作者不詳『蝦夷風俗図巻』(部分)が春里の原画かと思われるが、『日本』の図版と比べると、丸小屋右端の額で荷を負う人物の有無など差異がみられる。
- (15)——東北大学附属図書館狩野文庫、請求記号は狩：

3 - 9302 - 1。

(16)——『松前町史』史料編第1巻, 388～389頁。

(17)——『日本庶民生活史料集成』第4巻(三一書房, 1969年)409～410頁。

(18)——同前424頁。ハレ着については、拙著『北方史のなかの近世日本』(校倉書房, 1991年)の第Ⅱ部第2章「アイヌのハレ着と幕藩権力」。

(19)——秦憶磨『蝦夷島奇観』(雄峰社, 1982年)は、その「ヲンカミ(拝礼)」のしぐさについて「其状殆蝦の如し、按るに此礼状古今たかわさる成へし、古昔唐山に行て人に見へし時にも如斯せしにや」と述べている。松浦武四郎も「其形ち蝦のごとし。蝦夷の称是より始まりしかと思わる」と、『蝦夷漫画』で同様の見方を示している(『松浦武四郎紀行集』下, 富山房, 1977年)。

(20)——前掲『鯨御殿』9～10頁, 18～19頁。

(21)——前掲『日本庶民生活史料集成』第4巻, 445頁。

(22)——函館市中央図書館(旧市立函館図書館)所蔵本による。成立時期については高倉新一郎『新版アイヌ政策史』の「引用書目解説」では天明・寛政頃かとし、『日本北辺関係旧記目録』(北海道大学図書刊行会, 1990年)は宝暦頃かとする。

(23)——谷澤尚一「夷酋列像」成立の要件について(『三十七本のイナウ』北海道出版企画センター, 1990年)261頁。

(24)——『北行日録』(山崎栄作編集・発行, 1983年)69頁。

(25)——H・チースリク編『北方探検記』(吉川弘文館, 1962年)68～71頁。

(26)——拙稿「鯨漁に生きる人々」「昆布刈りのわざ」(菅江真澄から近世史をさぐる①②, 『真澄学』1・2, 東北芸術工科大学東北文化研究センター, 2004・2005年)で、菅江真澄の記述を通して和人の丸小屋について多少述べたことがある。丸小屋の形状はアメリカの先住民にも見られ、その世界的な広がりにも関心を向けたい。

(27)——前掲『鯨御殿』所収の「松前前期の謁見礼」。稲垣令子「近世蝦夷地における儀礼支配の特質」(民衆史研究会編『民衆生活と信仰・思想』雄山閣, 1985年)。

(28)——『津軽一統志』のうち「万間書控」(『新北海道史』

第7巻史料1(新北海道史印刷出版共同企業体, 1969年)187頁。

(29)——『東遊雑記』(平凡社, 東洋文庫, 1964年)175頁。

(30)——註(27)の越崎・稲垣論文による。越崎論文には同日記から御目見記事が掲出されているので、とくにそれを参照した。

(31)——前掲『新北海道史』第7巻史料1, 205～230頁。

(32)——『新撰北海道史』第5巻史料1(北海道庁, 1936年)66頁。

(33)——『松前志』(『北門叢書』第2冊, 国書刊行会, 1972年)113～114頁。

(34)——五十嵐聡美氏は「小玉貞良「蝦夷風俗画卷」について」(『紀要1991』北海道立近代美術館他3館, 1991年)で、貞良の3例の『蝦夷風俗画卷』を比較検討し、この『蝦夷国風図絵』は貞良とは別の手による写本の可能性が高いと述べている。

(35)——前掲越崎『鯨御殿』および註(34)五十嵐論文参照。

(36)——『新撰北海道史』第5巻史料1, 42頁。

(37)——前掲『鯨御殿』47～48頁。

(38)——高倉新一郎「幕府探葉使二階堂慎庵著 風土遊覧集」(『蝦夷往来』第12号, 尚古堂, 1934年)。

(39)——五十嵐聡美『アイヌ絵巻探訪』(北海道新聞社, 2003年)。口絵に『風土遊覧集』および『蝦夷国風図絵』の藩主謁見の場面を掲載。なお、本書は宝暦9年の松前藩による「夷画認他国エ指出事制禁」の触(前掲『旧紀抄録』420頁)にも着目している。

(40)——『盛岡藩雜書』第13巻(熊谷印刷出版部, 1999年)691頁。

(41)——弘前藩の「分限帳」(弘前市立図書館所蔵)などで、同藩の家臣名簿を調べているが、二階堂慎庵の名をまだ見つけていない。

(42)——『新訂寛政重修諸家譜』第3(続群書類従完成会, 1964年)200～201頁。なお、代数は『松前家記』(前掲『松前町史』史料編第1巻)による。

(43)——註(6)舟山論文, 55頁。

(44)——『東遊雑記』115頁, 121頁。

(45)——註(27)稲垣論文。

(宮城学院女子大学学芸学部, 国立歴史民俗博物館共同研究員)

(2007年5月7日受理, 2007年9月14日審査終了)

---

## **Ainu Courtesy Omemie (Uimamu) : Introduction to “Matsumae-byobu” by Teiryō Kodama**

KIKUCHI Isao

“Matsumae-byobu” is a folding screen depicting a castle town (Fukuyama) in Matsumae-han during mid-eighteenth century. Matsumae painter, Teiryō Kodama drew this screen being asked by Oumi-merchant who was in charge of Ezo trading. In order to understand this screen, I examined the Matsumae arrival section which exclusively depicted Ainu people.

Ainu people transported articles of tributes from all parts of Ezochi on a rigged ship every year around May. They built a mobile cone-shaped shack for temporary dwelling and stayed on a beach near the customs office (Okinokuchi-bansho). This shack was a necessity for Ainu people’s traveling. On the screen, there is Otona, Ainu’s head of village, and others who are guided by Matsumae clansman (translator) to Matsumae castle from their shacks. After entering the castle, they met the lord of Matsumae-han and given products such as rice, liquor and tobacco.

During early modern period, Matsumae castle town were often visited by Ainu people from Ezochi for trading called Uimamu. During 1640’s trading post fief system (Akinaiba-chikousei) had spread and trading ships from Matsumae were sent to Ezochi. This invited the decline of Ainu trading in the castle town. After the 1669 war of Shakushain, Uimamu trading has been changed into Omemie (Uimamu) audience ritual by Matsumae-han and we understand that this shows political dominance over Ainu. However, when we consider this phenomenon from Ainu’s point of view, eighteenth-century Omemie audience ritual may have subjective intention of Ainu people. I will explore this issue in this paper.

In the late eighteenth century, Ainu shacks disappear from Matsumae castle town. How do we evaluate this? Probably, this suggests the end of Matsumae-han and Ainu relationships during the eighteenth century.